松風村雨束帶鑑

第一

仙家の日月本長閑なり、臘を送り春を逐ふ、豈又然らんや。聖皇親ら長生殿にましませば、蓬萊王母が家に向たらずとは、是此時の天皇や、五十餘りの代々の君、天のなせる賢王、地に報ぜる明君と、すべて仰がぬ隈もなし。後宮數多侍ひし、中に色ある紫や、藤氏の御方に、日嗣の玉の男子親王、やすくと降誕あり。産屋の儀式桑の弓、蓬の矢事七夜の御賀、今日百二十日の御忌明き。殊に山王權現に、御母方の御願ぞと、齡千歳の坂本に、産神詣と聞えける。御乳の親には中納言行平卿の北の方司の前、明て十九の初子の乳。氏位よし氣質よし、此人をとて内よりも、それとさしぢの乳袋も、はるや錦の輦に、宮を抱きてあひごしの、前驅は華族の公達、在原の行平は、御乳母のよしみとて、春宮の傅になぞらへ御後見にて扈從ある。加持の師には元慶寺の座主遍昭僧正、

古例を引て御輿の先、金錢銀錢撒米や、白ゆふ波の濱傳ひ、山王の社に著き給ふ。神前にて初聲上げさせ參らせ、行平幣を奉り、天を父とし地を母とし、御心に天つ神入かはり、聖壽無窮と祈念あり。神子覡は神樂を捧げ三重神慮をすゝしめ奉る。神樂をさまる太鼓の頭、笛のひしぎに若宮は、わつとばかりに御目を見つめ、御息絶入給ひけり。人々驚忙、「這は如何に」と勦る隙もあらばこそ、はや絆切させ給ひしは、詮方もなき有樣なり。行平思案を廻らし行「しばらく〳〵。是はまさしく急驚風。行平希代の呪ひにて、蘇生らせ奉らん。御供社人等、一人も殘らず神前を立去り、案内するまで歸るな」と、仰せ給へば上下の男女、皆々麓へ下りけろ。さて北の方遍昭を招き、行「此宮御早世は、是ぞ天下の大事たり。和歌の浦の惡僧恒寂僧都は先帝の王子。宮亡せ給ふと聞くならば、一味を集め、王位を紊亂らんは必定。人知らぬ其内に、然るべき子を取替へ、宮蘇生り給ふと披露し、世の靜謐をおこなふべし。如何あらん」とありければ、司の前は養君の別れの涙に應へもなし。僧正遍昭打首肯、「君の爲世の爲、宜しく計ひ給ふべし」と、行平遍昭坂本の、人家民家殘りなく、尋ねもとむる嬰兒や。七本柳の木蔭より、若き賤の男產兒を抱き、暗然として彳めり。兩人天の賜と、「これ〳〵男子、卒爾ながら其子を我に得

させよ。當分の返禮望みに任せ、老後の榮華たるべきぞ」と宣へども、此男茫然たる顏色にて「ムヽ此處は日本か。某は丹後の國水の江の浦島太郎と申す者、思はず龍宮に到り、乙姫に契り、一歲の間に此の子をもうけ、古鄕ゆかしく、暇と申し候へば、此の玉手箱に八千歲の壽命を封ず、必ず開く事なかれと、與へて送る雲の波。彼のはしに浮み出、夢とも分ぬ古鄕の道、敎へてたべ」とぞ申しける。行平横手を打て、「其浦島は雄略天皇の御宇、今既に三百四十餘年なり。人界の一年は蓬萊の一日とや。忝くも神武天皇の御母玉依姫は龍神の娘、我國の皇統御母方は龍女ぞや。幸ひ其子を我に得させよ。十善の太子にそなへん」と始終を語り給へば、浦「アヽ誠。一歲に三百餘年を經て候。世變り人更り、賴む方なき身の上を、御恤み仰ぎ奉る。さて龍女の胎にやどりし此子、背に七枚の鱗ありて人間の乳房を呑まず　魚肉を食する異相の凡夫。御免あれ」と辭しけれども、行「いやとよ應神天皇は、鱗の尾筒永き世まで、御衣に裾を曳く始めぞや。少しも恥る事なかれ」と、宮の御衣を召させかゝ、御骸は引包み、「おこと密に葬り參らせ、都一條大宮、行平が館に葬來れ」と暇乞、又神前に立歸り、斯と語れば北の方、歎きの中に御悅び、僧正遍昭聲を上げ、「行平卿の咒ひにて、若宮御蘇生ましくて、めで度還

御。お供の衆御輿參れ」と山どよむ。「あつ」と應へて供奉召具、枯れたる葉に廿露の雨、岩に花咲く悅びは、まさるめでたき山王の、神を仰ぐや　三重　敷島の、和歌の浦曲に墨の袖、恒寂僧都は王子を出で、遠からぬ身も遠つ國、賤しき漁父の友鶴も、などか雲井に歸らざるべきと、いとど都を忘れかね、念佛してぞ在しける。爰に花室の三位葹丸といへるは、行平の北の方司の前の兄なりしが、公家の身ながら歌鞠學問手蹟に疎く、兵術博奕の逸遊に身を委ぬ、文盲不仁の惡黨ゆゑ、先途の官職にも進まず、我名を汚すばかりなり。相伴ふ伴健宗、千釼逸勢、釣竿擔げ下部共、網具取持せ來つたり。僧都御覽じ、「珍らしき下向、殊に漁人の容にて何の爲ぞ」と仰せける。葹丸承り、「さん候。都には若宮誕生ましく、某が妹司の前、中納言行平に嫁し、當春初子をもうけしゆゑ、御乳の人に附られしに、此宮ついに人間の乳を呑ず、鮮らけき魚を好んで、魚の脂に育ち候ゆゑ、大内にも置れず　行平が館に預り育て申すにつき、諸國の浦々申すに及ばず、當國は我々勅を蒙り、網引釣垂れ候が、此宮位に卽き給はば、日本惡王の國となるのみならず、妹聟の行平め、小舅の某さへ　蔑　に仕る、驕り甚だ超過せり。年來の御企、時節到來仕る」とぞ申しける。恒寂袈裟衣取て捨太刀脇挾み、恒「我れ先帝の太子と生れなが

ら、關白冬嗣が計ひにて、斯く淺ましき芋堀坊主。明月地に墜ず、白日度を失はず、天運の秋來れり　そも〳〵海中に鰾鰾といふ毒魚あり。味の甘きこと、西施乳とて美女の乳房に譬ながら、其肝腹中に入て人を害す事、博物志に記せり。背青く腹白く、無鱗にして見憎しとあり。我朝の河豚なるべし。是を與へば美味に愛で、若宮を始め行平一家鏖殺し、魚一疋で天下を奪るは、麥飯で鯉を釣」竿や。手々にをろす釣針の、さきをめぐらん報ひの程、淺ましくも亦恐ろしょ。俄に波風岸を洗ひ、潮をたゝく劔の鰭。尾は赤銅の扇を廣げ、利劔の牙ある大魚の形、小舟の走る如くにて、一文字に飛蒐り、三筋の釣針一口に、呑で引を引かれじと、三人竿を伸べ控へ、附て廻れど堪ゑずして、一度にふつつと嚙切たり。「葬」我本望の門出惡し。網にかけよ」「承る」と、浦人下部大網をろし、逸勢網の功者にて、網先取つて四方を圍み、ゑいや〳〵と引寄する。大魚は怒て波を渦き、潮荒汐吹かけ〳〵、網を沖へと引たりけり。逸勢磯に下浸り、「引けやしやくれ」と下知すれども、岩も劈く怒れる魚、さしもの逸勢踏もためず、波に漂ひ數十人、網の手繩に引立られ、又引汐に押し流され、「救助船〳〵」と呼はる聲も八重の汐、波の幾重や

三重　九重の廣き都に二人とは、よも在原の行平喇、美男藝能色好み、情の露の奥樣と、

其情の好さ隱れなく、聞て羨む辛氣瘦せ、此君ゆゑと洛中に、肥た女や絶えけらし。御家の諸大夫雛形右衞門尉罷出で、「御預りの若宮樣、奥樣の御乳を嫌はせ給ひ、御好みなればとて當歲子の若宮、魚類にて育て申し、萬一の事候はば、上よりの御咎め、君御一人の御過りと覺え候。人の性によつて乳の合はざる事もある。哺附くまで何時までも御乳を替て見んと存じ、乳持の奉公人數多呼寄せ置き候。御覽ありて召置れ然るべし」とぞ申しける。行平卿聞召し、「尤も〳〵去ながら、女は女の道なれば、北の方諸共に見て極むべし。それ〳〵」と奥へ使立ければ、色と情の司の前、子持の世話の氣配りに、身にも構はぬ髮容、人のたしなみ作るより、猶艶かに媚ありて、夫婦身を寄せ物蔭に、覗き囁き給ひしは、秋の紅葉と春の花、一度に見るが如くなり。右衞門尉罷出で「惣じて上つ方のお乳の乳人は、とり親といふ事あり。氏素性にも構ひなし。身元成立ち僞らず、具さに申せ」と一々に、由緒書にぞ記しける。

今樣うばぞろへ

甲乳母「奉公する身は始より、氣が弱ふてはなら坂や、春日の禰宜の妻なるが、夫は社の宮奴の、其すき〳〵の胥仕事、家は五人の朝夕やゝ、勸進能の地謠に、雇はれ戻る留守の中、暮しかねたる春の日の、微かな世を經る中々に、妹背はわりなきならひとて、子は三人めで候へども、乳は今でも瀧の糸、長ふ御緣もあれかし」と、莞爾と笑ふて申しける。雛「實に格好は好けれども、三人までの產巢とは、難じて言はば子過腹。薄き乳の緒は如何ぞ」と、帳には點もかゝらざりけり、乙「自は又孀烏、夫は弓取駒烏の、懸鞍に腰も懸け帶の、本締役や國元の、御用勸めに京住居。京は遊びの山吹の、色の仕過し染過し、身は墨染の櫻咲く、初瀨にあらぬ隱口の、子守奉公望めども、其名は包む袋乳。乳筋は兩方十二筋。今一筋で琴にはならず。三味線の皮八乳にも、負はいたしませぬ」とぞ申しける。雛「ヲヽ、誠に武士の妻琴と、聲の調べの風の音、峯の老松口松や、詞多きは馴染む程、朋輩づきも訝し」と、是にも點をかけられず。雛「其次出せ」とありければ、「あい〳〵」といふ聲附も、愛嬌ありける新玉や、年端も往かぬ子持態。丙「振分髮の時よりも、さる奥方に宮仕へ、お寢間の床の上下し、お主に袖を引れ初めたる阿漕が浦、御かもじ樣悟もじに、先お暇といふ籬、圍ひ置かれし下邸。過し彌生の花の紐、解て生れし

稚櫻。惜しや父御の顏と、瓜を二つにわりなくも、養子に遣しそれよりは、朝な夕なに此乳房、搾り捨ても猶脹て、漏て翻れて襟ぬれて、お恥しや」と打掩ふ袖詰て未だ間もないと、見えし脇腹膨やかに、肌の白妙顏の艶、一夜添乳の手枕は、兒より親に許せかし。此色に目が行平卿「使ひ頃好し乳も若し。若宮のお乳の人、長點なり」とありければ、北の御方非言して「彼の乳母置て抱て寢る、其乳呑子の子や產ん。ェヽ癖の惡い」と太股を、抓らせ給へば戲れて、抓りかへしつ擽りつ。行「それはそもじの猜氣よ」まはらば廻れ御所車、御所は惰氣も物憂し。工「是は都の月限りに、隱し置かれし手せんじや、鍋取り公家の子は產ど、後腹病ずの片破れ船、喞つ方なき浮身なり」と、賴りなき事いふもあり。雛「これは又田舍とも、京とも分て白雲の、上人にも恥ざるは、元は如何なる人やらん」戊「問はれて何とお返辭も、覺束波の須磨の蜃、松風と申す者なるが、都の人に馴れ參らせ、神かけて逆鉾の、思ひの雫結びとめ、產流したる嬰兒や、松とし聞かば歸り來んと、契りも今は僞りの、憎い男の面打ちなれば、如何なる水仕下女はした、身を鍋釜の相住しても、男に見せたき念一ッ。外に望みも候はず」と、睫の底のうろ〳〵眼、睨むも相手ありけなり。行平はつと胸轟き、顏に紅梅身には汗。氣も注かぬのに人

の顔、きよろ〳〵眺めておはします。北の方を始とし、「魚鱗好みの若宮に、幸ひのお乳の人」是も海邊に磯馴女の、蜃のうけなは詩人や、宗旨の、年紀の、宿のとて、問ふもなか〳〵鬼宿日、大明日の鷹揚に、今日は最上吉日とて、直に勤むる新參り、誠に戀も奉公も、緣のものなる緣傳ひ、司の前に誘はれ、三重宮の御力に出にけり。元來松風、奉公はかこつけに、行平に逢ん爲なれば、宮樣抱いた抱心、味へ往かぬも理りや。お側をそつとすり脱て、見ぬ顔したる辛い男め、記念の烏帽子狩衣を、出して恥をかゝせうか。いや〳〵包む間は頼みあり。言ふてしまふて秋の田の、かり〳〵ばつと腹立ても、主ある男の因果さは、勝て負になるものをと、胸を冷する玉水の、庭の板井に立凭り、手繰り車の釣瓶の内、誰とも終に水色に、瑠璃玻璃綾どる衣蹈しだき、美女の形ぞ顯れたる。松風はつと袖打被き、面隱しするばかりなり。女戀々たる聲を出し、「恐れ給ふな松風。みづからは龍宮城、善如龍王の乙の姫にてあるぞとよ。昔話に傳へたる、浦島太郎と我中の、思ひ子を日の本の、王子に立しも行平の、情を猜む惡人共、毒魚を以て亡はんと、數の釣針下せしに、なふ海の底にも戀の道。それから知たる親子の恩愛、我子の命を助けん爲、此身を大魚の形に變じ、三つの釣針一口に、食切取は取たれども、三本の釣針

が喉につまり、出入の息の通ひに横はり、身を苦むる此思ひ、九萬九千の鱗も立ち、口より咯く血は紅に、千尋の海を染むるなり。今宵も知らぬ命の内、我子の顔の見まゝ欲しく、是までは來れども、恐ろしや僧正遍昭、蛇形退散の守をかけさせ、常よりは日の御座の寶劍を、枕刀に置かれしゆゑ、龍畜の悲しさは近附事なり難し。御身の形を借て我魂を移し、我子を見せて、生涯の名殘を惜ませ給はれ」と、涙に咽ぶ五音の色、此世ならざる氣色なり。松風は哀れにも亦恐ろしくもそどろにて、松「例しなき御願ひ、否び申すにあらねども、みづからにも思ひあり。一歳行平樣播磨守にてお下向あり。御徒然の御船遊、苦を數寢の御情、三歳馴染の印の烏帽子、御狩衣を證據にて、京より迎を下さんとの、誓文誓紙何枚やら、皆僞りとなりし契り、紛す間は我魂、亂す事は致されず。許し給へ」と逃行く足も、物にまつはる如くにて、乙姫「ア、これ松風、我も時待つ命なり。暫しが程は是非からん」と、夕暮深き井の水の、波とう〳〵と卷上り、中より小蛇跳出で、松風の下がいに飛入れば、其儘に五體も痿れ氣も噎み、うんとばかりに反返り、暫し性根も附ざりしが、入變つたる龍女の魂「あゝら嬉しや我子に逢んー」と、褄戸を上り長押を傳ひ、對の屋の長緣を、さら〳〵〳〵這ひ轟かし、お方の障子を蹴破て、

飛で入るこそ不思議なれ。有繋親子のしるしとて、遂に他人の乳を呑まぬ、此の若「わつ」と目を覺し、抱きつくを抱き上げ、乳を哺めてぞ泣居たる。此聲に司の前、何事やらんと走出、屏風の影に身を密め、立聞給へど恩愛の、ちりにまじはる神力も、きれて知らぬぞ哀れなる。積る歎きを包みかね、「能も〳〵此母を、見忘れもせず抱かれし。愛しの者やヲ、愛し。乳離れしての昨日今日、父は男の大よそに、他人の手にて育つゆゑ、顏も細つて身も瘦て、有し形はなきぞとよ。音信せぬとて此母を、辛しと嘸や泣つらん。夜晝心は通へども、我淺ましき姿を見せば、夫の恥辱我子の恥と、押へて悚ゆる戀しさの、身の苦しみはいかばかり。阿波の鳴門の荒波も、物の數とは思はねども、人目の海は超がたし。四大海は汲干すとも、人の心はくまれぬぞや。稚心に聞置きて、必ず人に油斷すな。母さへ附添ひあるならば、危き事はなけれども、人の猜みの惡心の、針を喉に立られて、今日をも知らぬ命の内、見るも語るも限りぞや。母が膚に手を入れて、抱附てたも締てたも」と、抱き寄すれば聞入れて、乳房に喰附組合ひ、聲の限を泣叫び、聞く人ありとも白玉を、貫きあへぬ涙なり。北の方は興覺て、「あら不思議や。彼女が新參の身で親子の歎。剛染の乳をさへ呑まぬ子の、慕ひなつくは心得ず」と、屏風押除け出給

へば、鈴「なふ恥しや顯れし」と、子を押除てすつくと立ち、くるくゝ悶ゆる身の中より、小蛇飛出し失せければ、物の怪除きたる其風情、かつぱと臥て寢入しは、酒に醉臥す如くなり。ことはりや司の前、くはつと妬みの額の筋、目も角立たる聲を上げ、「ヤァ空耄れすな空寢入すな。其子は正しく行平殿とをのれが中に產したる子よ。ヱヽ曲もなきは我殿御。龍王の乙姫と浦島太郎が子と僞り、外妾の子を館へ入れ、剩へ其母めを、乳母と號て呼込んで、妾に恥を見せんとや。我も公家の娘なり。如何に外妾が可愛いとて、賤しき蜑の產だる子を、親王樣の宮樣のと、抱崇めたる口惜しや。貴いも卑いも男のならひ、數居一ッをこゆるぎの、傅に附ても居られねば、外のいたづら餘所妻は、知らぬ花よ折らば折れ。身は奧山に散る紅葉、蹈附にする男鹿。女子畜生惡心の、針が喉に立たるとや。其針とは妾が事か。ヲヽ針ともいへ釘ともいへ。針ならば蝮蛇の針、汝が五臟に分入るべし。釘ならば神木に打つ金鎚の、重き恨みはをのれにあり。夫にもあり。ありくゝ」有明の、月蝕欺く眼の曇、翡翠の下髮はつと亂れ、怒れる唇せゝ笑ひ、閃く舌は緋縮緬の、服紗をふくみし如くなり。司「サァ女返答せよ。男を誑せし其癪の、狸寢入の見苦しさよ。憎くし辛し腹立や」と、我と我身の袖を喰裂き袂を喰切り、宛がら

明王―王法を守る天の神

嵯峨野―さすに掛く

胸分―馬の胸部

狂氣の顔にて、「今は討ではかなはじ」と、守刀をひつそばめ、駈寄給ふを女房達、「這はしたなし暫く」と、引留むるを振切り〳〵引放し、枕近く立ちかゝれば、此處彼處より數千の小蛇、頭を竝べ二人を圍ひ、寄せじとこそは睨みけり。北の方も怖ろしさ、「さて凄じき女めや。夫を取られし我こそは、蛇とも蛇ともなるべきに、逆恨みこそ安からね」と、飛でかゝればパッと寄り、裾に喰付き纏付き、彼方此方へ追廻すを、龍女の所爲とはそも知らず、あれよ〳〵と逃惑ひ、「なふ怖ろしや口惜や。仇と情の敵味方、汝と我が戀爭ひ、假し今こそは負るとも、行平卿は定まる夫。邪のおのれに生をかえても添はせうか」と、追戻せば這ひ集り、弓手を拂へば馬手に片寄り、後を拂へば前に這出、くるり〳〵さら〳〵〳〵、千筋百筋繩簾の、裳裾に纏ふ如くにて、門外さして追出すは、怖ろしかりける三重有樣なり。爰に僧正遍昭は明王の御つげあり、若宮の御事、行平卿も氣遣はしと、緋の衣袖裾まくり、野飼の駒を引寄せて、我法の道和歌の道、三十一文字引かえて、三尺一寸の大太刀、嵯峨野の草になづむ駒、鞭をくれたる胸分の、尾花かき分け走り來る、二十歳ばかりの女房の、轡面しつかととり、「これ坊樣、出家と見かけて賴みまする。遣ませぬ」とぞ申しける。僧正聞給ひ、「ホヽウ出家侍賴まれて引くで

はないが、御所方に御大事の御祈禱請取しに、明王の御告ありて、胸騒ぎ心得ず、馳参ずる時節、遅なはつては上つ方の御命の障あり。こゝを放せ」と乘出すを、女ハテ待しやんせ。斯ういひかけて放しはせぬ。わたしも大事の命づく。高い卑しい隔てはあらじ。おむづかしい事でもなし。些との間こな樣の、大黒にして下さんせ」と、猶舌たるく引とむる。「いや是れ大黒は我寺に、傳敎大師の作もあり。春日の作も安置せり。左樣は要らぬ」と駈出す。女「アヽ、辛氣、さては御存じ候はぬか。内裏樣のお后樣、お公家樣の寺方のを梵妻と、晝は隱して長持に、入れて二股大根や、夜は抱れて子祭の、寢は致すまじ名計りに、命助けて下さんせ。左樣ない内はいかな事、やりやしませぬぞ、否ならば、殺して置て行んせの。平に賴む」と留めにける。僧正是ぞ天魔の所爲と、返答もせず、駒立直せば尾筒を取り、乘出せば鐙を控へ、右へしやくり左へ戻し、手綱に縋て引るれば、馬はけしとみ跳上り、力革を蹈切て、馬よりどうと落てけり。馬も悚ゐず高嘶きし、北嵯峨差して駈去たり。流石名を得し歌人とて、僧正遍昭取敢ず、「名にめでてをれるばかりぞ女郎花、我落にきと人に語るな」と、詠じ給へば松風も、戀ゆゑ歌も聞なら

春日―奈良朝の繁工

二股大根―蓋にかく名計りに―名計の夫婦となりて

我落にき―女に墮落する事にかけたり、古今集の歌

ひ、あつと感ずるばかりなり。時に雛形右衞門尉、若宮抱き駈來り、雛「ヤア松風これに御入か。申し僧正樣、あれこそ主君物語の須磨の浦の松風、不思議に館へ參りしに、龍女の魂松風につき、親子夫婦の因緣の詞、北の方聞違へ、嫉妬の餘り、舍兄の惡人莽丸に告知せしを、恒寂僧都に內通し、上をかすむる證據に、若宮を奪ひ奏問せんと、館に押寄せ騷動に及び候ゆゑ、松風を落し、宮を具足し參らする、御計ひ賴み奉る」と、大息ついて申しける。僧正騷がず、「何事かと思ひしに、恒寂坊が手並の程、さては安平御座んなれ。さりながら生拔つて侮られな。坊主頭が隱したし烏帽子は無いか」松「辛ひ」と、松風が身に添し記念の裝束取出す。遲「オ、珍重々々。顏も是ではなまぬるし。眞赤に塗たし、紅はなし」波に色ある廣澤の、岸の紅葉を露ながら、袖にこき入れ手に搾り、立ちかゝつて揉付れば、顏にも秋の初時雨、僞もなき紅なり。遲「南無三寶、彼へ群立つ大勢は、正しう敵。先づ暫し」と、一村茂る松が根の、薄高萱引覆ひ、身を密めてぞ忍ばるゝ。程なく恒寂、鹿毛なる馬に打乘て、五十騎ばかり哄と寄せ、駒を控へ、恒「ヤアヤア健宗、松風親子の者こそ北嵯峨へ落たれと、斥候の者の告けるが、此野邊にぞ隱れつらん。風上より草に火をつけ、燒討にせよ。火打付燒け、團扇よ」と、おめき叫んで

取圍む。雛形今は詮方なく、草押分て突と出、「ヤア非禮非道の痴人よつく聞け。帝都を騒がし剩へ、儲の君を燒討にせんなどとは、目前の勝利に後度の天罰受けんより、疾く歸れ」と呼はりける。恒寂から〳〵と笑ひ、「儲の君とは事をかし。それぞ松風といふ蜑の産だる行平が子よ。證據には背に七枚の鱗ありて、産屋より魚肉を食む、蟲に劣りし畜類を、宮と僞る行平が逆心、召捕て記錄所へ訴へん。あれ搦取れ」兵「承る」と、尾花の如く拔つれて、鯨波をつくつて取捲たり。右衞門尉只一人、子を抱いての片手討、防ぎかねて見えし處を、恒寂後をかい潛り、松風の小腕取て引伏せ、繩をかけんとせし處へ、風折烏帽子に紋紗の布衣、顏色紅葉として、桔梗苅萱蹈散し、十文字に駈來り、松風を取て引除け、帆柱立に突立しは、只木像の如くなり。ばん〳〵たる大音上げ、遍「我れを誰とか思ふ。和歌の聖柿本の人丸の脇立、頰の皮の眞赤いな猿丸太夫が神體ぞや。歌と戀とは同じ道。行平歌人の身なれば、戀を重んじ情を基とする處に、一旦佛の弟子と名乘、衣を墨に染ながら、人の善を猜み、徒黨を集め、王法を傾けんと謀る大惡人。歌人の加擔人致すべしと、住吉玉津島の神勅に任せ現じたり。サア此猿丸太夫を猿と思ふて侮るな。猿は人間に毛が三筋足らぬといへど　おのれにも三筋足らぬは、情と色氣と

記錄所―公事訴訟を取扱ふ所

風折烏帽子―立烏帽子のさきを折りたるもの

帆柱立―仁王立に同じ

猿の腰掛―懸芝の類にて抑氣の妙藥（俚言集覽）

智慧氣がない。人でなしの犬坊主。犬と猿との腕競べ、頬も眉間も搔破り、猿縛りに絡げつけ、猿の腰懸にしてくれん」と、かんらからとぞ笑ひける。恒寂騒がずゐ せ笑ひ、「ヱヽ、推參千萬なり。四相を悟る恒寂が、そも見知らじと思ふか。汝は廣澤の僧正遍昭よ。ヤア誰かある。蹴散せ」と下知すれば、郎等共打てかゝるを、僧正遍昭忍辱慈悲の利劍を提げ、火水になれとぞ 三重 防がるゝ。入亂れたる戰ひに、雛形深傷に身も疲れ、隱ふ處を葎丸、難なく宮を奪ひ取り、引伏せんとせし處に、廣澤の波逆卷上り、龍女は美女の姿を顯し、水を行く事陸地の如く、さら〳〵さつと走り上つて、我子を取て搔抱き、紅葉が枝に傳ひ上つて、莞爾と笑ふて息つぎし、神變こそは不思議なれ。蟄殘る奴們餘すな」と、僧正遍昭押取込め、既に斯うよと見えける時、龍女が袴の裳裾は延て、二十尋餘りの毒蛇の尾筒、僧正を卷上れば、僧正遍昭太刀拔翳し、下なる敵を指下しに、眞額肩先切散し、打てかゝれば卷下し、鱗の嵐 太刀の音、草大一度に震動して、逐ふつ捲つつ戰ひしは、前代未聞の 三重 神力なり。さしもの强敵踏もためず、皆散々になりてけり。「あゝら嬉しや是まで」と、夕波高く飛入て、美妙淨音鮮かに、「そも〳〵この日の御座の寶劍は、龍宮城の靈物にて、假に人王に傳はりし。今我本土に歸すぞや。人

間界は我執深く、疑惑に迷ひ汚らはし。親子諸共歸るぞ」と、猶も形は百ひろ澤の、池に蟠る大蛇の猛勢。岸には僧正降魔の姿勢、顏の赤いは猩々遍昭。蛇と猩々の力に治る、名も盃の、月の名所の池には波風、陸には松風、ざゝんざの聲悅びの顏、見せるも見るも諸共に、樂しかりける御代とかや。

盃―猩々と月の緣　ざゝんざ―陽氣に驅く聲

第二

移行く、月日ばかりはかはれども、かはらぬは世の憂節や。浦島太郎は若宮の、亡き御骸を烟となし、一條大宮行平の、館に尋ね寄しかども、いたはしや行平は、恒寂僧都が讒言にて、龍女の子を若宮と僞り給ふ、忠が不忠の逆鱗。殊に日の御座の御劍を龍宮城へ取られし事、皆一人の落度とて、勅勘の身とばかりにて、其行方も知れざれば、賴みも月日の影ならで、草木の名さへ忘れ果、他人にも緣にも、六十餘州に一人とも、知る人持ぬ身となれり。我身に添ふる物とては、龍女が與へし玉手箱、宮の御骨ばかりにて、あはれ昔の音信は、未だふみも見ぬ橋立や、丹後の國は古鄕と、思ひ寄邊の水の江

月日―年きにかく

まだふみも見ぬ―小式部の歌によりて陷と文とかく

に、やう〳〵尋ね着にけり。荒にし野邊を來て見れば、誰が標とも文字消えて、苔に埋るゝ古塚に、往來の人の立ちどまり、花を手向て拜しける。浦島里人に近付、「此處は丹州水の江の浦候な。此處に於て、浦島太郎と申す人の、ゆかりばし候はば、教へてたべ」とぞ申しける。里人共打笑ひ、「興がる事を問ふ人かな。浦島太郎といふ人は、何百年か以前の事、子孫もありとは聞たれども、何處の誰とも知る人なし。緣由といふは此塚よ。彼の浦島の子の代に、此標を築置たると、古い衆の言傳へ。浦島塚とて壽命を守るげんぶくしや。參りの絕ゆる事もなし　一拜みで十年づつは生延る。旅の人なら四五十年、延して通りや」と、笑ふてこそは通りけれ。浦島は我ながら、我身と更に思はれず。我龍宮に入りし時、四歲になる子を殘せしが、其子が後に成人して、父が爲とて此塚を、築置てやありつらん。我ぞいにしへの浦島太郎と名乘て、我子孫を尋ぬるとも、誠とは思はず、却て人に咎められ、憂恥を見んよりも、もとの海に飛入て、底の水屑となるべきと、思ひ定めて立ち出しが、いやまて、これに若宮の御骨あり。龍宮の慣ひに死人を忌めば、海中へは持ちがたし。此我塚に納めん」と、指添拔て草切拂ひ、塚を穿て安々と、御骨を納め奉る。向ふの方より田夫ども、「そりや盜人よ」と聲をかけ、ばら〳〵と飛蒐り、

げんぶくしや　元服者か

浦島が兩腕しつかと取り、「此頃山々の古塚を發き、納物を盗むといふはおのれよな。此塚は往古より、一在所として守奉る、壽命神の浦島塚。荒すは曲者、サア吐せ」と、先理不盡に打擲す。浦島眞直に言んと思へども、まてしばし、宮の御骨凡人の手にかけさせんも勿體なし。陳じて遁れんと思ひ、浦仰の如く某は、鰥寡孤獨の浪人者、渡世に詰り候へども、左ながら袖乞押入も成りがたく、主なき古墳を掘返し、太刀、鎧、朱などを盗賣候。此塚掘は掘たれども、取る物は一ツもなく、手間が損になつた分。御免なれ」と駈出るを、「どつこい」と取て押へ、引伏せ引立穿鑿し、玉手箱をちらりと見て、「すは盗み物是れなり」と、取付くを挈放し、抱ながらかつぱと伏し、浦「全く盗みし物ならず。重代の箱なれば、假令命は取らるゝとも、箱はいつかな渡さじ」と、我身を覆ふてことはれども、田夫ども聞入れず、鋤鍬もつて散々に、骨も折れよと打叩けば、眉間先を打割れ、兩眼も血に暗み、足も漂ふばかりなり。「口惜や。名乘て猶も子孫の恥」と、齒をくひしばつて包み泣き、目もあてられぬ風情なり。畏最早科は極つたり。夜に入て切戸の沖へ、簀卷にして沈めにかけよ」と、高手小手に縛め、引立んとせし處へ、賤しからざる女房の、老人の乘物に、供人引具し來りしが、走り寄て、玄「これ申し、近頃粗相な

餓―老いて妻なき者
寡―老いて夫なき者
朱―死骸の腐蝕せぬやう朱詰にする
切戸―與謝の海

事ながら、乘物には妾が舅、病本服の御禮參り。又ちと願ひも候へば、見過しがたき樣子なり。返禮は何なりとも、身の祈禱とも思召、其人助け下されかし」と、手を摺り貰ひかけらるゝ。田夫ども聞も入れず、「盜人助けて何の慈悲。構ふな退け」と引立行く。「乘物立てい〳〵」とて、七十餘りの老人、「ヤア〳〵これ在所の衆、盜人か人殺しか、科なふては搦めはせじ。去ながら某は、當國與謝の郡龜彦の庄司といふもの、身が家先祖代々より、子孫までの大願にて、人間はいふに及ばず、鳥獸物蟲螻蛄まで、斯樣の者を見捨ず、助ける家の願なるゆゑ、方々承引召されねば、命を代りにやるばかり。男だていふ身でもなし。地頭代官一村を、這つくばふても此者を、是非共に貰ひ申す。これ是れぢや」と手を合せ、額を地につけ詫にける。心なき田夫さへ、義理にせまれば合點し、「ハテ放火强盜したでもなし、癈疾づく程撲はする。助けて遣れ」と縄を解き、「サア立上れ」と引起せども、鋤鍬に强く打れて足立たず。連「御恩情は有難けれど、親なく子なく妻もなく、緣者一門知人も、一日暮すたつきもなし。お慈悲ならば死せて給べ」と、隱ひ伏て泣き居たる。庄「オヽ猶以て見捨難し。養生させて召使はん。奉公して此恩を送りかへせ」と、我乘物に抱き乘せ、烏目一貫取出させ、「在所の衆の御芳志にて、代々家

伸―陳べにかく

天氣―勅命

刑部省―訴を正し罰を行ふ官

の願破れず、悦び入たる心ざし、乏少ながら御酒一ッ」と、其身は老の徒歩跣足、嫁に引るゝ手の皺も、伸てぞかへる禮義の程、頼もしかりける 三重宿も身も、萬年榮ゆる龜彦の、庄司と國にかくれなし。斯る處へ都より、「山路の右中辨、勅使として御入」と、高らかにぞ呼はりける。遠國者の下部共、甲「勅使とは何事ぞ」、乙「内裏樣の御使よ。門掃け庭の塵取れ」と、上を下へとかへしける。庄司袴肩衣あらため、上段に迎へ奉る。勅使笏取直し、「天氣の趣餘の儀にあらず。そも〳〵汝代々仁道を尊み、物の命を助くる大願怠らぬ由、感じ思召され畢んぬ。然るに今度中納言在原の行平、御誕生の若宮を害し參らせ、あらぬ下劣の子をもつて若宮に取かへ、上を欺く私の至り、剩へ松風といふ賤しき蜑の色に溺れ、日の御座の御劍を失ひ、罪科重疊によつて勅勘を受け、京都を立ち去り行方知れず。是によつて刑部の省に下知を爲し、行平が類屬見合次第に討ち捨てとの仰なり。汝其期に出合ふて、必ず助勤はるべからず。若も家の願なるとて、助けだてして違勅に及ばば、同罪たらんとの宣下なり」とぞ述べ給ふ。庄司謹んで承り、「誠に邊土に生れたる此爺めが、勅宣を承ること、長命したる甲斐ありて、子孫までの面目、申上るに詞なし。然るに我等が先祖より、生ある者の死に及ぶを、見捨ず助くる願を起し、

代々〳〵終に願を破らず。助けぬ事は候はず。去りながら勅諚の趣なれば行平は逆心者、朝敵とや申さん、謀反人とや申べき。殊に先達て、重き宣旨を蒙る上は、某こそ年寄たれ、倅由良太と申す者、私用ありて攝州へ罷上り候。只今にも歸り候はば、行平が緣由一人なりとも討とめさせ、宸襟を安め奉らん」とぞ申しける。勅使悅び斜めならず「オヽ其義ならば親子心を合せ、一人なりとも討ちとめなば、官位に申し進むべし。我は當所與謝の社に一宿し、明日歸京すべきぞ」と、立出たまへば門外まで、送りてこそは別れけれ。かくとは知らで子息の由良太、攝州より立歸る。庄司も嫁も出迎へば、若き女の色深きを駕籠より下し、由「先以て留守の中御堅固にて悅ばし。さて此女中は在原の行平卿の思ひ人、松風と申す御方なるか、行平人の讒によつて帝都を開き、妻子方まで散々の有樣。敵追詰め危き折に行かゝり、少々働き、漸々と助け參らせたり。それ女房奥へ伴ひ、慰め申せ」といひければ、松「誠に不思議の御事、良人樣の御庇にて、難を遁れしばかりかは、いかいお世話になります」と、挨拶あれば女房は、「ハア何のお辭儀の入ませう。野でも山でも女子の身は、我人辛苦の多い物。先づおぐしでも梳しやんせ。鐵漿でも召しませい、御用の事は私へ。いざ先づ奥へ」と馳走する。由良太も父には暇乞ひ、勝手へ立

こいよ―濃いと来いよとかく

ひんずー干水の戯（極劇癖）

てぞ休みけろ　浦島太郎は庄司の情に命を繼ぎ、名を和田松と名乘り、足手惜まぬ奉公に、主も一入目をかけて、暮に及べば煎じ茶の、こいよこいよと呼れねど、たてて庄司に羞めける。庄司顏を打戍り、「こりや和田松、庄司が身の上一大事出來せり。なんと賴まれてくれふか」といふ。和「口惜い御意を承はる。拙者は一度死ぬべき身。御情にて今迄存命たるがひんずの命。何處に由緣かゝりもなし。一命を投出しての御奉公、何に違背の候べき」と、誠を盡して答へける。庄「オヽ滿足せり〳〵。左あらば語つて聞せふ。能く聞け。そも我先祖は當國水の江の浦島太郎。三百年以前の事」と語りも敢ぬに、和田松ぎよつとせしが押默止、「さては我が孫彥の其末の子にてありしよ」と、心も濁る水の江の「浦島殿の御子孫か」と、餘所に言なす昔人、此處にありとは知らずして、詳しく語る墓なさよ。庄「先祖浦島慈悲心深く、龜を助けて龍宮の蓬萊山に入り給ふ。其子其孫彥玄孫、某は六代の鶴の孫、一子由良太は浦島の、七世の孫といふものよ。世々放生の願あつて、さてこそおことも助けたれ。然るに其方も知る如く、一天の帝の勅諚を蒙り、行平一家は助けまじ、目にさへかゝらば討とめて、叡慮を安んじ申さんと、白髮をいたどく此庄司が、勅答を申せし處に、伜由良太が松風を助け、此處に圍置く。由良

太も道ある男子なり。親の詞を立んとて、よも松風は殺させじ。此庄司めも七十まで、一生人に嘘つかねば、人の嘘も聞て居ず。我子の義理があればとて、彼の松風を助け、一天の君を僞つては、子々孫々の瑕瑾なり。今宵由良太が目を忍び、松風を討取るぞや。汝庄司が恩を思はば、もし由良太が聞付け出逢ふ時、命を惜むな防ぎ討て。此事賴むぼかりなり。親は殺す、子は助くる、道は二筋立たれども、親子の心の隔たるは、家滅亡の運の極め。七代まで續きし家を、此時に滅す事の口惜や」と、返らぬ老の繰言に、不覺の涙せきあへず、和田松も涙に咽び、さては彼等は我爲の、六世七世の孫子かや。我ぞ先祖浦島と、名乘らんと思ひしが、いやく松風討んといふ者に語ては、行平卿の厚恩は報じがたし。所詮此庄司を某が手にかけ、松風を助けんと、一圖に思案極めしが、思ひの色を悟られじと、和「義理にせまつたお詞、拙者も涙を流して候。御心やすく思召せ。いづれもお主と申しながら、親旦那にはかへられず。松風をお討なされ。後詰は私」と、誠しやかに申ける。庄「オヽ左樣なふてはく。宵の中に酒呑で、風くはるよな、覺られなしづまれく往て休め」和「お休みなされ」と首肯き合ひ、奥口へこそ入りにけれ。由良太が女房立聞し、「南無三寶、松風を殺させては、助けた夫の一分立たず。此事早ふ知ら

後詰―あとおし
風くはる―樣子を知つて逃げらる

子の刻―辰にかく　七十路―無にかく

白杉戸云々―白に知ちず、庄司に陸子をかく

悪な事―聞くにかく

せう。いや〳〵いふては親子の間を割く。舅君に意見をせうか。いや彼の年まで我を立て詰め、言ひ出いて戻さぬ人、よも承引はし給ふまじ。夫にや知らせん、舅をや宥めん。兎やせん角や」と女子氣の、了簡更に定らず。「ムヽ思付たり。松風に密に語り、何方へも落すべし。時には夫の一分立ち、舅にも難つかず」と、思ひ定めて女房は、更るを待つも長き夜の、鐘も聞ゑて人もはや、子の刻半ばになりにけり。庄司は素より古兵、勅命を蒙つて、かほどの事を仕損ぜば、何面目も七十路に、生過たりや此命、官位を賜り子孫の名も、雲井に揚れひばり骨、痩たる膝節高褰げ、鉢巻しめて屈んだる、腰も勇める心より、ぐつと反たる長刀、我宿なれど忍ぶには、心も暗き奥座敷、老の足元わなわなと、薄氷を踏む心地して、身を縮めたるばかりなり。浦島太郎は現在の、六世七世の孫子なり、今は主なり命の親、一方ならぬ恩愛も振捨て、庄司を害し、松風を助けんと、思ひつめたる鞘口も、拔かけてさす一本刀、奥の勝手は白杉戸、庄司が傍に突立て、鼻息をさめさし足の、ふくむ心は敵と敵、知らぬ闇こそ危けれ。由良太が女房、夫の寢入を待受け、添寢の床をそろりと脫け　松風を落さんと、是れも一間に忍びしが、思へば女の大膽な。夜半に男の閨の戸の、悪な事かと疑はれ、何と言譯あら恐ろしや。又遲

篠竹云々―篠に忍ばれず、不思議に節をかく

とめき―衣にたきこめたる香

なはしば松風の、敢なく討れ給はんかと、跡引戻すぬき足に二人の側を摩違ふ、心は揉る身は頤ふ、胸もさはつく小笹原、足に疵あるたゝずまひ、壁に縋りて息をつく。案の如く由良太眼覺し、「女房の臥床になきは心得ず。新參の和田松が宵の面相物ありげなり。見屆けて首二つ、竝べんものを」と寢亂髪、枕の刀押取て、有明しめし出ければ、一間々々の戸は明いたり。「さてこそ」と夕闇に、迷ふ四人の息づかひ、忍ぶとすれど篠竹の、不思議と思ふ顏相も、互ひにそれと知らばこそ。由良太は次へそつと出、戸口に支え待伏たり。何とかしけん山良太が妻、紬のとめきの薫をば、庄司が鼻にきゝ咎め、「これぞ松風。氣取て逃る合點ぢや。落しは立てじ」と太刀拔そばめ、衣の薫を聞もらさじと、香をもとめてぞ引添行く。浦島は二人が追風そよと聞き「すはや」と耳を欹て、取逃さじと慕ひ行く。それぞと知るを最後にて、只一討の勝負なる、心の刃鋭くも、危くも亦哀れなり。無慘や女房、跡より庄司が慕ふも知らず、松風の臥し給ふ、枕にそつと立ち寄る處を、庄「これ松風ぞ」と打頷き、引寄せて胸元を、一刀にぞ刺いたりける。刺されてうんと喚く聲。先越されしと浦島は、庄司が髻を押取て、膽先をぐつと差徹す。庄司騷がず、「狼藉あり出合やつ」と呼はれば、由良太は父が聲と聞き、「火を出せ」と言

捨て走り寄れば、下人共、提灯燈火畫の如く、周章ふためくばかりなり。由良太大きに驚き、「さては此下郎奴が所爲よな。樣子は知らねど主殺し、親の敵に極つたり。討て捨ん」と飛蒐れば、今はの庄司「やれ待て由良太はやまるな。我勅諚にしたがひ、家の願を破り、人を害ふ先祖の罰、必ず人ばし恨むるな。孝行ならば留めを刺し、早く殺せ」とばかりにて、世に苦氣に見えにける。女房も息の下、「舅君にも我夫にも、難をかけじと思ふより、松風どのを落さん爲め、是まで忍び參りしが、誠の松風討れ給はば、夫の武道の瑕瑾のみか、舅君の浮名も立つ。取違へて自が殺されしは家の幸ひ、露恨みとは存ぜぬぞや。殺して苦痛をやめてたべ。なふ由良太殿、可愛ゆくば殺してたべ」と、涙も息も、絶々に、目も當られぬ風情なり。浦島も涙を流し、「某は行平卿の御厚恩の者なるゆゑ、命の親の主君をあやめ、天道助け給ふべきか。申す事も候へども、言ふ程因果を晒すに似たり。はや〳〵首を召されよ」と、思ひ切たる其氣色。由良太も今はあぐみはて、親を討つは下人なり、我妻を殺すは一人の親、敵と味方を分きかねて、前後にくれてぞ見えにける。此事近邊にかくれなく、與謝の社に逗留ありし、「勅使山路の右中辨、御入りなり」と、いふより早く突と通り、有「いかに庄司、行平一家に於ては助くる事能はず、

討取て奉らんと慥に勅答申しながら、助くるは何事ぞ。早く松風が首討て捧ぐべし」と、大音上て怒らるゝ。松風今は覺悟を極め、「人に歎きをかけんより、我命を捐んには」と、既に出んとしたまひしが、勅使の顔を屹度見て、松「なふ彼こそは僞りもの。行平樣の小舅三位葎丸といふ大惡人。必ず孰れも箝るまい」と、いふを聞て葎丸「それ松風よ。搦め取れ」「遁すまじ」と白丁ども、一度にどつと込み入りたり。浦島「得たり餘さじ」と、込み入る仕丁片端より、取ては投げ〳〵、葎丸に突支ゑ、浦「これお公家樣、我等は庄司が下人ながら、行平爲にも下人分、何方らへも附く内股膏藥。此膏藥で手負は癒らず。南蠻流に人の脂。うぬめは脂がありさうな。刀目入て括し上げ、脂搾つて搾粕の、粕公家にしてくれん」と、左足を蹈で打てかゝる。葎丸は强力者、太刀を弓手に受流し、すりちがひにしつかと抱く。浦「さしつたり」と無手と組み、半時ばかりぞ捻合ける。「由良太はなきか。あれ防げ」と、呼はる父が今はの疵、妻の深手を見捨かね、心を配るぞ道理なる。葎丸は組ながら亂れ入りて、「松風を搦めよ」と下知すれば、此處彼處と馳廻り、瀨見の九郎といふ郎等、玉手箱を見出して、「さて結構なり美しゝ」と、封捻斷て蓋明れば、不思議や紫雲擾〻と、棚引出でて浦島が、上に置たる眉の霜、頭の雪の白髮と、忽ち

箝る—欺かる
白丁—木綿の白張を著る仕丁
南蠻流—今いふ外科術
擾々—亂るゝ、騷
さしつたり—オイ合點

姿も衰へて、身は百年の老木の柳、風に縮める古木の力も、折れて敢なく下になりてけり。由良太も今は堪られず、「微塵になさん」と討てかゝれば、薙「かなはじ」と表をさしてさつと退く。立歸つて引起し、曳「こは开も如何なる事やらん」と、呆れ果たるばかりなり。其時翁涙を流し、「今は何をか包むべき。おこと等が遠つ祖、昔の浦島太郎とは、此爺にてありけるぞや。三百餘年の齡を經て、玄孫鶴の彦を見る。子よりも孫はいとほしければ、猶其彦の孫までも、次第々々に可愛さが、彌增るぞや、いとしいぞや。龍宮の神通にて、八千歳の壽命を封じ與へられしを、汝等に轉じかゑて授けんと、深く包みし甲斐もなく、明て悔しき玉手箱、我さへ年も傾きて、孫子に添ふべき間もなし。暫しなりとも抱かん」と、庄司を膝に抱寄すれば、早や息斷て身も冷たり。連「南無三寶淺ましや。逢ふも別れも一時かや。今一度爺かと呼べ。先立つ我は留まりて、孫の孫なる其孫の、死目を見るは何事」と、聲も惜まず泣きければ、由良太夫婦、松風も、共に平伏し泣叫び、少時正氣を失へり。葎丸は新手を召具し、又引返し、喚き叫んで切入たり。連「ヤアをのれ孫の敵。浦島太郎が老耄の瘦力、試よ」と無手と取てしつかと組、「八大龍神、大海神、力を加へたび給へ」と、一しめ、二しめ、三しめなは、神力にや通じけん、大の男

子よりも孫云々―孫を愛する念切なる感

三しめなは―綱注連にかく

子の葎丸、宙に掴んで曳やつと差上、大地にかつぱと打付くれば、微塵になつてぞ失せにける。猶も寄來る雑兵の、手元に寄るを取て投げ、邊りへ來るを踏散し、大手を廣げ此處彼處、八方無隅に追廻す。此猛勢に恐れをなし、嵐の木の葉群雀、むら〳〵ぱつとぞ逃げ散りけり。立ち歸つて一息つぎ、手負の看病、庄司が回向、心遣ひに身も疲れ、手を引れたる浦島が、七世の孫に愛敬の、有磯海より猶深き、龍女が戀の誠の玉、思ひの玉、奇縁の玉、通ふ心の玉手箱、二人の心かはらずも、末の契りを松風と、慰め須磨へぞ送りける。

有磯海―有りにかく松風―待つにかく

昔男ありけり―伊勢物語の書ぶりを眞似たり　おほやけ―朝廷　やぶしわかざる―藪隆を也分ず　照す風、古今集日の光やぶしわかねば云々の歌をとれり

第三

昔男ありけり。おほやけおぼしてつかふ給ふ。同胞多き其中に、左近衛の中將業平の朝臣となまめかし。仁明天皇の御宇かとよ。須磨の一木の松が枝に、五色の花咲出しと奏問す。やぶしわかざるめぐみのしるし、見て參れとの勅をうけ、かりにいにける裝束は、常に一際こゆるぎの、老繋したる冠に、重ねの袖も紅の、花田の直衣太刀平緒、

銀箭云々―矢の箭を銀にて作り鵰の羽にてはぐ（和訓栞）
陰陽の神―穢の神
闕はし―霑にてゆきわたる事
闕官―官をやめちる

上の袴は着し給はず、金色の奴袴裾を曳て、銀箭の眞羽の矢負ひ、蒔繪の弓を持れたる、宿直姿に弓箭は、例し稀なる扮裝を、直衣布袴と知る人ぞ、知られて末の世々までも、に書寫す陰陽の、神といはれし器量なり。伴の大弼健宗も別勅を蒙り、相伴ふて下向せしが、兼て寄宿の鹽屋のあさう、柴屋の與次御迎に罷出、御宿冥加にかなへる條、頭を地につけ言上す。業平仰せけるは、「目出度き君がいさをしの、草木までも麗はしく、今年大内の御籬の松に花咲て、三千年の色をあらはし、上下悅びの思ひを爲す所に、又此處の一木の松に、花咲くよし叡聞に及ぶ。夫れ堯舜は命を天に享け、松柏は命を地にうくる。國に松あること人に堯舜あるが如しと、古き書に見えたり。されば賢王の砌には、松にも花の咲くべき事。此須磨の浦曲に帝王も在さず、松に花の咲きけるは、此波の底は龍宮にして、龍王のみぎり疑ひなし。兄行平卿思はずも、龍宮へ御劍をとられ、闕官の身となり給ふ。斯る折から、寶劍を取返す便もと、望みて下る御使ひぞ。思ひ寄ることあらば、方々賴む」と宣へば、伴の健宗突と出、「某は又行平を尋出して搦めよとの、院の廳の下し文を承つて向ふたり。汝等も存じながら、隱し置ば曲事ならん。コレ業平殿見知ごしとな思されそ。綸言なれば見遁しには成り申さぬ」と、武骨にいへば中將も、「御

得もの—得手

臼になりたや云云—當時の流行唄、之より兩宿に下女となれる松風村雨の身の上を說く、米に歧、餌に卷くを三俵—俵の數

尤御尤。我々は天上にて初冠し、終に下態の業を知らず。御邊は昨今の公家まじり、今まで下部育ちなれば、科人の繩取、搦め縛りに得ものならん。兎も角も」と苦口の、鹽屋が邸に入り給ふ。健宗は中將を烟たさうなる眼付、睨みふすべる柴屋が門、旅宿々々に三重別れける。唄「臼になりたやよやよやよ、臺碓に。米とうなづき逢ふものをとよへ。いよあはふものを」米とうなづき招きあひ、隣同士に此季から、置れし露や下女子、彼方の仕事もしてやれば、此方のも亦手傳ふて、漏さぬ底の心まで、とんと開たる三俵、これ公家樣の御膳米、踏むとは罰があたろかも。いざ白搗や白き肌、骨柔かにうら若き、足を並べてあしたゆく、唄「あふてならずば、思ひもきろが、文もやられぬ中は憂や」うしとないひそ色に染む、其唐錦碓の、男柱も妬し。松「なふ村雨や、其方にお宿召されしは、業平樣とて御嫖致よしの殿ぢやげな。此方の客は、名から怖い健宗、根性惡さうな顏付、膳立するも手が痿へる。和女はほんに果報ぢやや。好い男の飯焚やる。あやかりものや」と羨みける。村「ヲヽさればいの。お松聞きや。我も生れは須磨の者、赤兒の時から明石へ養子に往たれども、二人の養ひ親に離れ、姊樣もありと聞く。今此須磨へ歸りしが、何のをかしい事もなし。聞けば和女は京へも上り、深ひ戀もあつたら月日、な

あつたら—有と可惜とかく

ずんと云々―たんと戀をする氣

下り坂―男に信實なくして見劣りする譬

壁に釘―豆腐に鎹の諺に同じ

機歪―不平均

二人が肩―二人が互に肩に手をかく

んの糸瓜の皮も身も、痩る程な戀ならば、ずんとする氣ぢや男の目利、教へてたも」と姉妹、知らで語るも緣ならん。松「エイ何たいやる。それに師匠が入るものか。されども先は男振、それが好いとて一心の下り坂、石車に乘て仇惚するは、男の屑の葛餅、皆一口は食ふけれど、あとから剝る生壁の、釘ごたへせぬ戀ぞかし。心が粹で、殿好うて、寢た譯よしの三ツ拍子、それは鬼に鐵棒の、鐵で作つた身なりとも、逢ふ夜繁いは病者になる、そこらの懸引味やつて、心碎かず氣を研く、此碓の臼と杵、陰陽和合の濡のお師匠、二人が中の挨拶は、撓歪みない鈔懸の、桝で量る戀路でも、心で惚たは氣の毒な。只戀しいが因果骨、沁渡る」とぞ笑ひける。村「あれ業平樣のお出ぞや」松「烏渡覗いて目を肥さう」と、二人が肩に手を打かけ、門を見入て、松「好いぞや」村「イヤ好いといふ段ではない」松「去ながら如何にしても冠がかたい。しやんと取らせて月額が、剃せて見たいじやないかいの」松「いや〳〵何があれがかたからう。此方に大事の書物がある。其繪を見れば冠着て、裸體になつた公家樣が、書てある」とぞ私語ける。松「いやまだ器用なお人で、醫者心もあるかして、業平袖の下といふ手合の萬病圓、殊に女子に能ふ利くげな。一服貰ふてやらうか」といへば、村「ムヽさては和女は、業平樣と近付か」松「い

ける程に―戀が深くなりける緒にの略

藥飲む―男を持つ譬

昔の情云々―行平の身の上を觀く

隣―柴屋

や知る人ではなけれども、これは人に隱す事、兄御の行平樣と此我らと、鳥渡したもやもやが互に深ふなつて來て、上る程にけるほどに、まんまと京まで上りつめて、散々首尾が違ふて、又それから、下る程にけるほどに、飯焚迄に成下つた。弟御程はあるまいが、行平樣のお藥も、呑では口が放されぬ。甘い事じや」といひければ、村雨聞もあへず、「行平とやらいふ公家樣と、名の立ちし人ならば、さては松風樣かいの」　松「ヲヽ我が本名は松風なるが、和女は誰ぞ」　村「なふ自こそ、少さい時明石へ養子に參りたる妹の薄雲ぞや」　松「さては身は薄雲か。二人の親の形見ぞ」と、えもせず。親にも姉にも松風樣、何とてか今までは、尋ねも訪ひもしたまはぬ。お懷しや」とばかりにて、嬉し泣にぞ泣にける。松風も悅びて、松「一期に逢はぬ姉妹に、廻り逢ふも互ひの力。去ながら、構へて藥など飲やるな。姉も餘り呑過して、藥惱みで此仕合」と、打笑へば村雨も、差合言し恥しさ。顏に火を焚く臺處「「忙しや」とて入にけり。昔の情忍ぶ草、忘れぬ須磨に零漂來て、見れば數多の都人。氣も魂も消ゆるばかりに行平は、鹽屋が門へ走入る。業平の御内衆、「何者じや慮外な」と、追出せば隣りの門、「御免」といふて駈込むを、健宗が下人ども、杖棒持て追出す。行「眞平々々〜、些との間、逢と

宿札―之にて僧宗の居るを知る

まで―例の助辭
先達て―前に死んで
ものごし―言葉つき
一樹の陰―ふとした事より睦じ

もない者がある。ちよつと置て下されよ」と、手を摺てことはれども、下人「いかな〳〵此ぢうちはお公家衆のお泊。行衛も知らぬ旅人が、腰懸ることもならぬ」といふ。行平は涙ぐみ、「然らば是非に及ばぬ事。殊の外息切れたが、何と茶でも湯でも所望したい」とありければ、下人「いや〳〵火の吟味が強ふて、飲する事はかなはぬ」と、猶胴慾にいふ處へ、内より村雨斯と聞き、村「旅の人ならいとしけに、これ茶一ッ」とすゝめける。行平茶碗を取もせず、宿札をちらりと見て、「南無三寶」と村雨が、前垂上て顔さし入る。村「アアこれ此處な人はいの。近頃聊爾千萬な。女子の裾へあられもない。出て往きやらねば打ぞや。しや眞にをかしい」と引出せども、行「アヽ申し〳〵。全く卒爾に候はず。いかふ人を忍ぶもの。お家を見かけて駈込ました」と、兩脚にしつかと抱付く。村雨ときめきて、「いかさま見かけが上方衆。憎からぬ風俗。殊に見かけて賴むとあるを、引れはいたさじ。去ながら、お連はないか一人身か。此處の處が聞たいまで」行「ヲヽいかにも能い御念。連は女一人、はやそれは先達て、これ此處の植込の、松原に屈んで居られまする」とて、猶身を添て抱しむる。村雨の心のおさめ、姿ものごし業平樣に、微塵ほども違ひなし。及ばぬ人より此人を、近道にと分別すえ、村「一樹の蔭のふりがかり、ほんに粗相な事な

くなる事（説法明眼論）

そんなもの一人目ある故いふ

新しい一事々レ

れども、構ひなくば夫婦になり、互の面倒見る樣にはなるまい事か」とありければ　行平は何をがな暫しの寄邊を願ふ折に幸ひと、行「始よりのお心ざしに、ほだしを打れ候ぞや。殊に我等に障もなし。二世かけし女房ぞや」　村「未來までの我殿」と、見初め言初め紅染の、赤前垂の褄結び、竹「とてもの事に奥座敷へ、通りたい」とぞ引被ぐ、裾もほら〳〵しどけなし。門の影より松風は、それと見るより走出、「なふ行平樣か」と取付く處を、行「アヽ妄しい。そんな者では御座らぬ」と、逃て行くを引留めて、松「あれは妾が妹の村雨といふ者。はてさて大事ないはいの」と、縋付ども振切て、行「出方に無ふても此方には大事がある」と、又駈出るを村雨は、「これ姉樣、これはわしが只た今、夫婦の契約した男。粗相なことをいふまい」と、抱きついてぞ留めける。松「ヤアこれは新らしい。此憂苦勞は何故ぞ。廻り逢ふ爲ばつかり。一寸も放さぬぞ。サア此方へ」と引立る。村「何のどこへ放さう」と、引合引留競合し、二人の心ぞ道理なる。健宗が郎黨此聲を聞付、「アレ行平よ」と注進す。「それ餘すな」と健宗は大勢打連れどつと出、眞中に押取籠め、二人の女を取て突除け、敢なくも行平の、諸手を取て捻伏しは、妻戀ひ雉子音を啼て、鷲の摑し如くなり。業平斯と聞も敢ず、走出て見給へば、案の如く行平卿、擒とな

つておはします。「はつ」と心は騒げども、左あらぬ體にて莞爾と笑ひ。「ムヽ此者を行平とは、そも誰が見知たるか」と宣へば村雨進み出、「これは妾が夫なるを、姉にて候ふ松風狂亂いたし、行平様と呼しゆゑ、斯様に捕はれ候を、詫言なされ下されかし」と、泪ぐみてぞ申しける。業平千々に思案を碎き「さては音に聞く松風とはおことが事か。夫を慕ふて狂氣となるはならひなれども、有繋賤しき蜑のしるし。夫の面を忘れつる。淺ましさよ墓なさよ。狂氣の上の狂氣ぞや」と、恥しめ敎へ給ひければ、松風兎角の返事もせず、暫し涙にくれけるが、松「狂人とてな笑ひ給ひぞ。筋なき事をいふにこそ。顏も形も行平様に、餘り能く似たるゆゑ、形見と思ひ慰みしものを、形見こそ今はあだなれこれなくば、忘るゝひまもありなんものを。あゝら戀しの行平様や」と、敵を見る目は空涙、夫を見る目は誠の涙。其二筋を一筋に、平伏し焦れ泣居たり。業平御覽じ「これ健宗殿、狂女の詞用るもひがくし。彼奴助け返されよ」と、いへども健宗合點せず、「助けるも助けぬも某が胸中。面々の役の外要らぬお構ひ。それ引け」と、苦々數言切たり。中將騒がず「道理々々。憎きは此下郎め。狂女にいはされ、我こそは行平といふ顏色の見苦しさよ。兄行平は、忝も平城天皇の孫王正三位の中納言。をのれ如きに似るべき歟。

いふにこそ―いふにはあらずと反語に用ふ
形見こそ―古今集にある歌

古い格―弟壓勘進帳の話をとりたればなり

よしなき所へ徘徊し、兄弟の名を下す。エ、腹だたし」と弓押取り、丁々と打給へど、健宗更に承引せず、「これ中將殿、弟の身にて兄を打つは左のみ手柄にもならぬ事。古い格をなされな」と、心を許す氣色はなし。業平此處ぞ大事の場、猛も陳じて見んと思ひ「これ健宗殿、口惜き事を承る。彼奴誠の行平に極らば、陳ずるまでもなし。我も近衛の武官をかけ、弓箭を帶するからは、御邊が只中、錆矢一つ射かけ、奪ひ取んに何事かあるべき。其上、弟の身には、兄を打つなどとは如何に。假へ命を助かるとて、兄を打ては助けても本望ならず。弟に打れては助かつても一世の恥辱。重ねて御邊が口留に、兄にあらざる證據を見せん」と、情なげに行平の、髻を取て引伏せ、履たる淺沓碎けてのけと、腰の番をさん〴〵に、踏付給ふ心の中、遣る方もなく哀れなり。業「我ばかりは誠しからず。これ〳〵松風、夫でない證據の爲、踏めや〳〵」と宣へば、松風わつと仰天し、途方に暮しをはつたと睨み、業「業平行平兄弟が一代一度の大事。狼狽るか」と怒り給へば、泣く〳〵も足を上は上たれども、夫は神にも譬しものを、如何なる過去の因果ぞと、思へば足も顫はれて、一足踏では「許して下され」二足踏では「御免あれ」と、聲をかくして泣叫ぶ。業平は又位といひ、影をも蹈ぬ兄親を、沓にかけたる此冥罰、大地も裂

淺沓―漆塗の桐の上履

影をも云々―師の陰は三尺の髓に上る

て奈落に墜ち、諸神諸佛の知見の矢、只今頭に落來るか。許させ給へと心中に禮拜し、涙を包む涙の色。松風は悚えかねわつとばかりに聲を上げ、五體を擧て泣きければ、村雨は行平を抱起し撫摩り、聲も惜まぬ人々の、歎きの體こそ哀れなり。鬼畜に劣る健宗も、疑ひや晴れたりけん。「ムヽ此上は行平にてはなかりしな。去ながら念の爲いかに鹽谷のあさうやある。事の實否を糺すまで、汝に屹と預け置く。をのれが下女の村雨と夫婦と聞く。若し松風に通じなば、行平に極つたり。心をつけて注進せよ。罷立て」といひければ、松風は詮方なく、言へば夫の命のかい。言ねば夫を妹に取らるゝか。淺ましや」と、又繰返す涙の糸、亂るゝ體をさまぐに、宥め給ひし業平の、辯舌といひ謀、實に花も實も在原の、優し男の情には、鬼も柔らぐ實男。口健宗も打解て、旅宿に引くや　三重鹽汲車、僅なる浮世に廻るはかなさよ。心盡しの松風に、海は少し遠けれども、關吹越ゆると眺め給ふ、浦曲の波の夜々は、實に音近き蜑の家、里離れたる通路の、月より外は友もなし。友も親子も同胞も、一つに寄て團めても、殿御一人の愛しさと、擔ひ比べし鹽桶の、片荷づりなる我思ひ、鹽燒衣引換て、人戀衣濡衣、ころも違へず宵々は、泊りに來るつま烏、かはいくの念からや、夜の道さへ怖からず、そともの戸口に

在原―有にかく
鹽汲車―鹽汲みたる桶を載せる車、之より謠曲松風にある句
僅なる―僅にかく
關吹越ゆる―旅人の秋涼しく成りけり關吹越ゆる須磨の浦風、續古今集、行平
片荷づり―我綴の置き故に云ふ

降る—振るにかく行様—雪にかく世の塵不祥—松風の不幸なる身の上を示ふ

着けり。裾戸を叩けど音もせず。如何はせんと四邊なる、小石を掻寄せ手に溜て、座敷の檐へばら〳〵〳〵と、宛がら雨の如くなり。行平轉た眼を覺し、耳を澄して庭に下り、誰が音信の判じもの。こひしと知らする村雨と、解て明たる此裾戸。此方へ〳〵とありければ、村「雨には降ると聞くも嫌、根かゝ消えたい行樣」と、とんと手を懸け靠れ合ひ、閨の一間に入給ふ。世の憂き不祥憂き中は、鼻の先なる我夫を、いつ松風の名を喞ち、身を喞ちても詮方なく、せめての事の念晴し、夜な〳〵門に立忍ぶ、心の中こそせつなけれ。斯とも知らで村雨は、今宵の霜夜勇めん爲、汐汲む體にもてなし、村「これこれ斯うしたふりなり」と、桶の中より樽盃、肴とり〴〵取出せば、行「誠に上なき心ざし、何時の世にかは忘るべき。とても御身と某は、長ふは添はれぬ中なるに、かゝる情は如何なる緣。此恩は報じ盡されず」と、しみ〴〵と宣へば、村「ゑゝ氣の減ることはしやんすな。御世に出させ給ひては、松風樣の殿御なり。弟子樣の御差配で、今の間は我らと夫婦。男に勤める奉公を、恩に被ることかいの。烟の好いうち先づ一つ」と、氣輕にこそは笑ひけれ。垣の外にて松風は、「ヲヽ〳〵それや又言やるが愚であろ。今の内こそ貸ておけ。やんがて此方へ取返す。借物は大事ぢや。疵が付たら聞はせぬ。エヽ業平

ひんづる―干水の活用にて干上る意か、又は引取るの音便なちん

玉の盃云々―色好まざらん男は玉の巵の當なき心地ぞすべき（徒然草）

樣も小差出た。どうぞ差配の仕樣もあらう。たま〳〵逢ふた男を餓鬼の物をひんづる、小猿の頬を押すやうに、餘り出來ぬ御差配」と、口の内にてぶつくさと、身を捻寄てぞ恨みける。行平、盃傾け、ずつと干て差し給ふ。垣の外にて松風は、夫の盃異女に飲することの、口惜や妬まし。手だに屆かば打毀さん。取て飲んと息を張り、拳を握る垣間見の、念力や通じけん。村雨いたどく盃に、銚子の酒をかたぶけて、注げども〳〵雫さへ、湛らぬ玉の盃の、底の拔けたる如くなり。若し盃に疵ありやと、四邊を見れども溢れもせず。換て見んと盃を、取かえ〳〵注ぐ程に、銚子の酒は注ぎ干して、露にも濡れぬ盃は、干潟に照りし空背貝、現ともなき風情なり。松風は執着の、無明の酒に醉沈み、顔は入日の紅に、足もたよ〳〵よろ〳〵〳〵。うんとばかりに鑓ひ臥し、前後も知らずぞ寢入ける。村雨身の毛も慄と立ち、「何とやらん空怖ろし。早や臥し給へ」といひければ、乧「いざ」とて結ぶ手枕の、逢ふ嬉しさに恐ろしさ、打忘れて諸共に、とろり〳〵と寢入らるゝ。既に更闌け凄じき、磯の小夜風鹽嵐、軒を穿つて松風の、袂をさつと吹開けば、胸の裡より一團の、心火たちまち燃出て、夫婦臥たる閨の上、四邊を照して燐燐たり。光の中に聲あつて、「アヽ腹立や〳〵。姉の夫に枕を竝べ、見苦しきぞ村雨。起

はためく—鳴響く

百錬—よく鍛錬する、妥は烈しき形容

女人地獄云々—女人は地獄の使にて能く佛種を斷つ（唯識論）

嵐—あらしにかく

夢路云々—之より松風村雨が夢の中に龍宮に入りて寶劍を取る話

て歸れ」と叫びしが、村雨の懷より、恚の焰爛々と顯れ出で「世にゆるされし我契り、かなふまじき」とはためき渡り、打ち合ふては二ツに別れ、又打寄せてはさつと散り、屋鳴震動夥し。爭ふ聲に行平卿、起上て見給へば、形は臥してありながら、姉妹嫉妬の恨みの魂、百錬の雷雲を破つて電光の虛空にさへぎる其猛勢、恐ろしなんども類ひなし。其時行平大音上げ、「エヽ淺ましょ〳〵。女人地獄使能斷佛種。此世からなる地獄ぞや。假へ生々附添ふとも、行平が流人のうち夫婦には成難し。よしなき契を慕はんより、龍宮に分入りて、日の御座の御劍を奪返さば、其人こそ二世までの夫婦なれ。如何に如何に」と宣へば、松風が聲として、「ヲヽ我は素より蜑人の、夫の爲に捨ん命、露程も惜からじ。龍宮城に分入て、寶劍を取るべきぞや」村「いや村雨も蜑ぞかし。妾がそもや負くべきか。百尋入らば千尋入らん。千尋入らば八千尋入つて、御劍の所在を尋ぬべしや。尋ぬれば〳〵、隱れは嵐」の波にのりて、火焰は松風が聲を顯し、村雨が一念は、井戸の青波燃立ち〳〵、井筒は夢路の龍宮世界。天に群り地にわだかまりて、池水をかへして入りにけり。

木の瓶云々―蓼に木葉と思ふが波に變じ橋端が岸となり遂に大海に入る狀

晉子―常に白鶴に乘る昔の仙人　富貴草―牡丹

玉京云々―皆仙人の棲む所

龍神風流

夢路あやしき海原や、底の草木は引かへて、磯の玉藻と亂れ合ひ、木の葉は波と立騷ぐ、沖の鷗濱千鳥、檐端は岸と鳴尾潟、果は渺々漫々として、際もなく涯も知らぬ水底は、五色の波のたちまちに、龍宮世界となりにけり。瞰上れば、青天蒼々として白日空に輝き、又瞰下せば、麗水湛々として金の砂鮮かなり。山は金色巖は瑠璃、園には玉の梢を連ね、西王母が桃枳棋が梨、不老の櫻爛漫と、不死の柳を混雜て、錦をたゞむ木々の色、栴檀木や反魂樹、常磐の森の初紅葉、千代を血潮と染なして、葉がへぬ梧桐玉柏、三ッ葉四ッ葉に榮ふらん。孔雀鳳凰晉子が鶴、松と竹とに舞遊べば、比翼の鸚鵡迦陵頻、瑠璃の巴旦杏、琥珀の梅、珊瑚の葡萄を賽りけり。花の八重菊富貴草、赤きは旭紫は、夕日に照て光さす、蝴蝶も綾の翼を揚て、甘露の露に眠るとや。山田に四季の穂に穂を出し、畑には一年三熟の、瓜茄子累々たり。玉京崑閬藐姑射の山、蓬萊宮とはこれなんめり。夏は凉風冬は暖風、さつ〳〵〳〵ゆう〳〵と吹渡り、峰の木枯、笙篳篥を奏すれば、谷の嵐は琵琶琴の、調べをなして明暮に、耳を悅び娛めり。宮殿樓閣建續き、虹の架橋

かけまくー掛けと投くもとかく

璫—垂木の端

瑤琤—玉の飾り

紫雲の廻廊、霞に聳えし樓門に、天慶山宮、第二の門には梯仙皇宮、遙の奥の唐門には、大龍王宮といふ三つの額を、かけまくも轉輪王の都かや。心詞も及ばねば、筆にも繪にも寫されじ。水精輪の地をならし、七寶七重の玉垣に、金銀の壁をつけ、珉瑁の甍に四季の萬花を彫付て、琥珀の欄干瑪瑙の璫、瑠璃玻璃彩る扉を開き、礫礫の瑤珞眞珠の華鬘、玉の簾を捲上たり、紫磨黃金の大床に、美妙莊嚴の壇を構へ、日の御座の寶劍を、注連引廻し籠置しは、恭しくぞ見えにける。岩を疊みし岩倉には、潮滿珠汐干珠。紺瑠璃の址に青海波といふ文字を金泥に記せしが、「すは人界の蜃乙女、寶劍を奪はん爲龍宮城へ來るぞ」と、波の鼓を亂調して、址の蓋の開くと見えしが、俄に早潮涌出て、八方に滿渡れば、天地を動かす沖津波、海水を飜へし、雲を浸して夥し。見せばやな、幾夜逢での浦の蜃、しほたれぬ間も兩袖の、乾かぬは开も誰ゆゑぞや、辛きにも猶戀ずまの、姉と妹が恪氣の波の、底の利劍を取梶も、櫓櫂も及ばぬ戀の海、押分けかき分け、わけて言れず語られず。藻に栖む蟲のわれからと、焦れあこがれ、思ひ餘りし蜃の逆手を現か夢か。たゆたふ波のうねくに、浮つ沈んづ苦しみの、恨みの底は底もなし。あとより寄せ來る波頭に、漂ふ姿は村雨に、負じ劣らじ後れじと、浮洲の岩を飛下て、息つ

乾かぬ—涙に乾かぬわけて—あけて

藻に栖む云々—蝦に似たる小蟲をわれからといふ、古今集、藻の刈る藻にすむ蟲の云々の歌による

址—麓

大海を手で堰く—事の叶はぬ譬
たく縄—たぐる
縄にかく
あちくと—あちくとも
卿手—繁き喩
海松—見るに辯
くゆたのたゆたに—大にたゆたひて
須磨—爲るにかあら嬉しや—是より又謠曲の句をとる

ぎあへず泳ぎゆく。おろかなりとよ大海を、手で堰の戸の關守も、通ふ心はよもとめじと、手繰苦しき蜑のたく縄、蜑の呼聲聲小舟、ぐれり〳〵とかはり行く、男心は頼みなや、波のたちゐも何故ぞ。餘所に引く手の網はあらくと繁くとも、潜ればくゞる戀の蜘手も柵も、脱けつ潜りつ、焦れ烏の啼かぬ日は、あれども逢ぬ日とてなく、思ひ忘るゝ時もなく、三年は此處に須磨の浦、何時の間に誰がかいほして、我が逢瀬を飛鳥川、干潟となりし袖を見よ　袖濡るゝともかはくとも、我が一道は澪標、思ふ目的は違へじの、波をきつたる波の紋、巴に廻れば巴に追蒐け、車に廻れば車に慕ひ　引て留むる寢くたれ髪を、底の玉藻と海松め和布に身は纏はれて、解にとかれぬ涙の海の、ゆだのたゆたに漂ふ有樣。一つ迷ひの我が心の蜘蛛の巣に、我とかゝりし名も數ならぬ、身に及ばぬ此憂戀を、須磨のあまりに罪深し。夢を覺してたびたまへ、三瀬川絶ぬ涙の浮瀬に亂るゝ戀の淵はありけり。松「あら嬉しや。あれに行平樣のお立あるが、松風と召され候ふぞや。いで參ふ」　村「淺ましや淺墓の、其心ゆゑにこそ。あれは磯邊の松に映りし月影よ。行平は御入もさふらはぬものを」　松「うたての人の言ごとや。彼の月こそは行平よ。假へ少時は分るゝとも、まつとしきかば歸り來んと、つらね給ひし松が枝に、映り

し月の桂こそ、浮名に立し戀男よ」　村「實になふ忘れし。別るとも、待たば來んとの言の葉を」　松「此方は忘れず松風の、立歸へん玉章の、文の便を黄楊」の櫛、さし來る潮をかき分て、見れば月こそ波にあれ。　松「底まで月のさしたるや」　村「うれしやこれも月あり」月は一つ影は二つ。滿潮の、夜の枕に月を寢せて、憂とは思はぬ假寢かなや。片割れ月の片われも、廻り〳〵てまんまるに、逢ふ夜有磯の磯鮑、思ひつくより離れじと、任せたる此三熊野や、神といふ神證據にて、親を地獄と血に染し、筆の數〳〵文枕、引寄せ抱て囈語にも、忘れぬ中を死なば死ねとや。生て甲斐なきいきの松原、生き畜生恥知らず。恨めしや、實相無漏の大海に、五塵六慾の風は吹ねども、猶執心の戀慕の石の火、嫉妬の火燧、燃たち〳〵起請は烟。灰は霞か夕霧か。暗む眼にせきかくる、涙は潮袖も身も、浸すばかりの沖の石。　松「彼の波の彼方にぞ、龍宮城はあるらめ」と、思ひさだめて飛入れば、〳〵「後れじもの」と續いて入る、底には惡魚惡龍の、鰭を並べ肥を揃へし、鯨の餌食とならばなれ。今こそ一生一代の、互の戀の潮界ひ。さし來る潮には突流され、寄せ來る波には押流され、肌を劈く岩石巖。磯の藻屑は五體をからみ、上には海渡る空檜の音、下は此世も忘れ貝、浦の鹽貝空背貝、刃を蹈むが如くにて、足寸々に切れわたり、

磯鮑―鮑の片思の譬を含む
親を地獄と―親を地獄に墮す法もあれ熊野の神に誓ひし我詞に偽なし
實相無漏―煩惱を離れて菩提に入る
潮界―勝負の界ひ目
空背貝―貝殼

渚―無にかく

縋陀羅王―以下八大龍王の名

恆沙―印度の恆河の沙、多き譬

縋らんとするに便なく、取らんとすれども水玉の、湛りつべうは渚の千鳥、啼て妻呼ぶばかりなり。松「夫ゆゑならば命を捨ん」村「我も捨ん」何か恨みの有磯海、龍宮の中へと飛入て、七重の樓門、八重の築土、九重の壇にひらりと上り、安々利劍を取たりけり。海上俄に震動するは、八大龍の怒りかや。難陀龍王、跋難陀龍王、娑迦羅龍王、和修吉龍王、德叉迦龍王、阿那婆達多龍王、摩那斯龍王、優鉢羅龍王、恆沙の眷屬引連れ〳〵、冥火の潮を吹かけ〳〵、火焔の嵐さつ〳〵〳〵〳〵と、須磨の高波劇しき夜半の、夢に取たる劍の刃、渡るも深き戀の道。傳はる國の御寶の、お供申して歸る波の、須磨の浦かけて、吹や後の山嵐。關路の鷄も聲々に、夢もあとなく夜も明て、村雨と聞しも今朝見れば、松風ばかりや殘るらん。

村雨と聞し云々―謠曲にある句にて張は人に聞せず

第四

司の前道行

出て行く我は京獨樂、彼の人の心の内は獨樂の心。つらや尖りてつまばらみ。安からぬ

そぐはぬ—釣合はぬ

御達—女の尊稱、御女中方

夫婦塚—前小野頼風の妻然れて放生川に投身したれば夫も後に身を投げたりと云ふ舊蹟（萬葉記）

埴生—いぶせき小屋

鶴—鴨るにかく

氷山—郡山の事朝もよひ—麻嘗よしの意を朝に用ひたり

神崎江口—名高き遊女町

世にまい〳〵と、何時まで一人舞ひくらす、身は憂きことの司の前。殿に退かれて此三歳、一本だちの木に竹や、そぐはぬ遠も便りには、僧正遍昭伴ひて、志ざしゆく須磨の浦、明石縮のちり〳〵と、上る朝日の東山、北山松の嵐を聞けば、昔の秋の萩狩に、玉蕈初茸紅茸や、御達腰元女の童、夫婦見つけて嬉しさの、奪取勝の我袖に、殘る匂ひの松茸の、松としきかば歸り來んと、詠じ給ふも如何なれば、我が待宵にはつれなかるらん。西に傾く有明の、月の中なる名取川、其名木も紅葉して、落葉の筏さし下す、末は淀のや男山、麓に立る夫婦塚、其二道に頼風の、悟氣爭ひ理をもちて、霜に更たる女郎花、蘭も桔梗も刈取て、賤が埴生の冬籠、屋根葺く苫ふく秋の鴈、人やかけたる網の、繡眼鳥眉畫鳥鶺鴒、山雀小雀四十雀、また百舌鳥の鳥、音して君は反れて行く、氣が鶴の高槻や、同じ思ひの思ひにも、思はぬ人を思ふこそ、思ひの塵の芥川、向ふに高きは武士の、名に傳へたる甲山、高き心も忍ぶには、誰が忍びの緒結び初め、解にとかれね氷山、池田伊丹の朝もよひ、賤の山人打連て、さんさ露にしほるゝ眞柴採る、笹の小笹をかき分け〳〵、入るや箕面の山の奥、身の置處何處とも、さして定めん泊船、神崎過て音に聞く、此處ぞ江口の色湊、讀みすて見捨て口吟みすて、書捨て文の數〳〵の、中

隱良川―乍らにかく　菅垣鹿踊―三味線の手かいらう―鹿の鳴聲に偕老をかけしなさ―弱る狀にいふ

出女―驛妓（俚言集覽）

にも併し長良川、ふかいに沈む尼が崎はや大物の浦松や、遠山松の、松の繫きかざょんざ、ざんざらめけば、風の菅垣鹿踊り、あれ妻戀の雄鹿雌鹿、さをしかが焦れ〳〵、御菅の森に鳴く、其かいらうの聲までも、我身の契何時〳〵と、其果しなさとけしなさ、心の疲れ戀疲れ、旅の疲れに足立たず、宿を惠美壽の神垣や、西の宮にぞ三重着き給ふ。前の中納言行平卿は、松風村雨姉妹が、戀慕の夢の念力龍宮に通ひ、御劍不思議に返らせ給へば、馬よ輿よと出世の歸洛、急ぎて行くも秋の日の、影も傾く西の宮に、御宿をこそめされけれ。司の前は僧正遍昭、女と法師の相泊り、人の惡口姦しし、別に今宵は泊らんと、別れて宿をもとめしが、いたはしや司の前、行平とは知り給はず、本陣に立寄て、司「連もない一人旅。宿は貸さうといふ人あれど、皆生男の合宿。氣遣でなりませぬ。女子衆と一所に、どふぞ寢させて下さんせぬか」と仰せける。出女ども不審を立て、「よしありげにて供も連ず。お錢はあるか」と訊ひければ、司「金銀はちと用意あり。おあしとては持ねども、是非におあしとあるからは、これなりとも」と管にさし、綾錦にていろ〳〵に、飾りし錢をぞ出さろょ。女子ども手に取て、「さても〳〵美しい。斯んな錢はついに見ぬ。お泊の女郎樣のお慰みに」と取囃す。折しも村雨立出て、「これは楊弓嫺陸の、勝負にか

字―不詳、漢音にて「あし」の略か

曲舞―曲藝

歌くどき―歌曲に合せて廻す事

浪從―（つらひ

うねどり―蜻蛉と舞ふ

うぐるぐや〳〵―獨樂の歌

くるおあしならん」とありければ、司の前聞給ひ、「いや〳〵字にて候はず。獨樂と申して都には、上は雲井の君を始め、公家武家、町人色里の、色は素より山賤の、賤が伏屋の妹背まで、玩弄びの流行物。さて獨樂の威德には、久しう廻ふが手柄にて、或は曲舞ひ歌くどき、又一とまはしの其中に、一ィ二ウ三ィと數よみて、何千舞といふ獨樂あり。御出家衆は一舞に、阿彌陀經を三遍讀み、俳諧師連歌師は、百句の間舞もあり。勤めの妓は長客の、一切半や二切は、物の見事にゆるりつと、床の濟むまで舞ふて居る、粹な獨樂もありと聞く。我らもさま〴〵ある中に、斧柄といふ獨樂を、宿の借たい追從に、廻してお目にかけん」とて、疊紙を押廣げ、總糸しごく手品よく、手玉も優に獨樂廻し、「これは優しきすさみや〳〵」と、四邊の男女旅人も、我も〳〵と集りて、立かゝつてぞ見物す。

當世獨樂盡し

司「先づ獨樂の種々は、歌書の部立をかたどりて、四季の獨樂を始めとし、神祇釋教戀無常。春の獨樂とは舞出しの、聲長閑かに響き出、彩り飾る花形は、宛がら梅の鶯獨樂。すはりもやらずうねどりて、うぐるぐや〳〵、うぐるぐつとも鳴たるは、苗代小田の蛙

獨樂。さて又夏に繪糸の、はづみ強しと夕立の、とう〳〵どろ〳〵舞ひ轟くは、空に知られぬ雷獨樂。蟬の鳴音や寒蟬獨樂。秋はさやけき金貝の影を數へて一ト二タ三ィ四ウ、十二十三十四十五十千烏の、千は幾千二千里を、越す名月獨樂。番々を立分て、其勝負を爭ふも、秋の季を取る相撲獨樂。冬は冴えゆく時雨獨樂。音の荒きは霰獨樂。獨樂と心との共摺れは、からりん〳〵、かんらからとよ、豐の明りの神樂獨樂。しやんとすはつて音たてず、搖ぎもせぬは釋教の、觀念獨樂や座禪獨樂。無常の獨樂は早や消えて、あだしの獨樂とは名付たりけり。それより戀の山越て、ゆらり〳〵と搖めくは、歸る晨の通路獨樂。袖のうちなる引獨樂は、餘所に漏さぬ玉章獨樂。二ッ竝んで舞ふ獨樂の、ちよつと障て退たるは、人目忍んで接吻獨樂。心すはらずぶりしやりの、いぶりぶり獨樂そりやひぞり獨樂。又打合て口說獨樂。來ぬ夜積りの恨みては、突出され獨樂振られ獨樂。中むすぼれぬ繪糸の、今日も昨日も晩もくる〳〵明日の夜も、又くるり〳〵、くるりくる〳〵、廻し心の好い中は、枕竝べて床入獨樂。幾夜契りを重ね獨樂。車にめぐる盃獨樂。數を揃へて踊獨樂。手品は面々かはれども、舞ふと舞はぬは心の沙汰。戀にかたどる此獨樂の、其名限り知られず」と、語りてこそは廻しけれ、村雨は奥に入り、

金貝―獨樂の廻るを見れば金色の貝の如し

豐の明り―節會・禁中の酒宴

早消―すぐ止まる

ふりしやり―抑れて怒る

いぶる―無理する

くる〳〵―來るにかく

嫉妬深き云々―嫉妬深き女は去るべき一つなれば云ふはしたなき―不粗合

斯と語れば行平卿、「今一曲所望して、見物せん」と出給ふ。司の前はつと驚き、「なふ行平様か我夫か」と、人目も恥ず縋付き、涙に咽び給ひしが、行平とつて突退け、はつたと白眼み、「何の面目に面を合せ、夫よ良夫よとは推参ならずや。惣じて嫉妬深きは三女の一ツ、娶ることなかれといふ本文あり。斯く逆鱗を蒙り、一度び御劍を失ひしも何故ぞ。科なき松風を粗忽に妬み、大悪人の葎丸に告しこと、短慮といひ、はしたなき振舞、民の女に劣たり。行平一家が恥をさらし、天下に浮名を流せしも、皆をのれが一心の僻より起つたり。此松風はな、賤しき浦の蜑なれど、嫉妬を恢え、妹の村雨と、某夫婦になしたるゆゑ、鰐の口なる露命を助かり、一味に姉妹、夫を思ふ夢中の一念、龍宮に入て御劍を取り、只今歸洛することも、二人が蜑の厚恩ぞや。形は人間、心は鬼女。妻にてはなく敵なり。誰かある引出せ」と、切齒をなして宣へば、松風奥より駈出て、「なふ奥様お久しや。御恨みは道理なれども、御本妻を押除て、賤しき我等が勿體なや。只古への御情の、御恩をどふぞと附添ひし、念力通つて御劍を取り、此世の望み適ひし上は、行平様を奥様へ渡し參らせ、みづから姉妹一日も、生て居まいと言合せし、偽りならぬ其證據。サア村雨、日頃いふたは此處の事。合點か」村「合點じや」と、二人が肌より九寸五分、

するりと拔て手に手を取り、刺違へんとする處を、北の方走り入り、二人の兩手に縋付き、北「何しに御身を殺さん。なふ留めてたべ人々」と、涙に咽び給ひしが、「揃ひも揃ひ似も似たり。心たけたる姉妹や。恥しの心底や。みづからも亦方々を、退せて添んといふでもなし。行平樣に廻り逢ひ、嬉しき一言聞くならば、それを此世の樂みにて、殿御は御身と夫婦にして、妾は其場で何時も、首を縊めんと常々に、心かけたる其しるし。これ疑ひ晴れ給へ」と、肩押脫て見せ給へば、これも肌には煩惱の、絆の細引罠にして、首に纏ひし其風情。松風も村雨も、「いとほしの御有樣や。我も人もこれほどまで、男思ふは何事ぞや。可愛は因果かや。味氣なの我々や」と、三人わつと抱き合ひ、聲をはかりに行平も、供の人々心なき、出女下部に至るまで、皆々袖をば濡しける。斯る處に雛形右衞門尉、由良太諸共、赤になつて駈來り、雛「只今敵と出合ひ、恒寂めは討漏しぬ。副將軍と仰がるゝ健宗を討取候。早々御歸洛遊ばせ」と、太刀に首を刺貫き、勇みにいさんで申しける。行平喜悅淺からず、「御劍返らせ給ふといひ、一方ならず浦島が、孝行の德慈悲の德、雛形が忠義の德、遍昭が和歌の德、松風の戀の德、とく〳〵都の門出に、先吉方の神參り」皆々徒步にて乘物も、駕籠もつゝたり目出たいも、つゝてとつたる西の宮、

目出たいも云々　鯛を釣つてとりし西の宮の惡比須とかけたり

惠美壽の社に急がるゝ。

昆吾溪の寶劍―昆吾の山より出る鐵にて作れる劍にて鋭利なり よく玉を切るとぃふ

第五

昆吾溪の寶劍は、人を照すこと水を照すが如しとかや。在五中將業平は、御劍歸座の趣内奏し、行平夫婦、僧正遍昭、浦島、由良太相具して、朝參あるこそめでたけれ。御劍を玉の床にする、清涼殿の日の御座に還御なし奉り、則ち業平は藏人の頭、行平は還任の中納言兼民部卿、二人の蜃をも四位に叙し、播州一國の鹽濱、殘らず知行すべしとの宣旨なり。さて浦島の翁が昔、日本紀を引せられ、「更に疑ふ可らず。生ながら神に祝ふべし」と、網の明神と神號を賜はり、丹後風土記に載せられ、由良太には菅川の庄、三百餘町を宛行はる。行平中納言進み出、「臣等此度天恩の榮耀にほこること、全く龍神の加護。僧正遍昭導師にて、廣澤の池にて龍神を供養し、彼處に芝居を構へ、狂言師を集め、某も立混り、俳優の狂言を仕り、龍神を慰め申したし」と奏せらる。天氣ます〳〵麗はしく、「五穀豐饒萬民快樂、君も行幸なるべし」と、吉日良辰吉方を、選みて芝居の柱立て

めて大鼓―目出度にかく

のさものー例の氣儘者の戯念なうー殊の外

存じまするーさやう存じます

なかくーいかにも

明日よりと呼ばふなる、人の聲までめで太鼓、勇める音に勇みあひ、老若男女貴賤都鄙、袖ぞ滿ける。三重シテ八幡大名「劍は筥に納め、弓は袋に收るといふ、太平の御代に生れ逢うて御座れば、何暗い事は御座らぬ。幸ひ今日は空も麗々と長閑に御座れば、慰みに出やうと存ずる。先づ太郎冠者を呼出して申しつけふと存ずる。のさ者あるかやい」ワキ「はあお前に」シテ「念無ふ早かつた。汝呼出すこと餘の義でない。今日は空も長閑な空じや。慰みに出やうと思ふが、鞠の會か、弓の會か、但しは舟遊びか。又野遊山などは何とあらふ」ワキ「御遊山と御座れば、何れもお慰みにならぬことでござりませぬ。其中でも今日は空も長閑に御座れば、野遊山が能ふ御座りませう」シテ「汝も野遊山が好からふと思ふか」ワキ「存じまする」シテ「野遊山か」ワキ「野遊山」シテ「野遊山ワハア、野遊山とは出來いた。氣が晴れりつとして好からふはいや、サア斯う往かふ、汝も供をせい」ワキ「畏つて御座る」ッレ「罷出たる者は、此邊の猿引で御座る。今日は天氣も好ふ御座る程に、旦那方の家の内の御祈禱に廻らふと存ずる。先づ斯う參らふ」シテ「やいくー太郎冠者、あれへ來るは猿ではないか」ワキ「なかく猿で御座る」シテ「あゝ大きな猿じやな。はてさて大きな猿じやな。ヤイ汝あれへ往て言はふには、たのふだ人の鞦韆が殊の外損じたに就

て、猿皮靱になされふとある。其猿皮おこせといふて、取て來い」ワキ「御意では御座れども、おこせと申した分ではおこしますまい」シテ「おこせといふておこすまいな。然らば少しの間、猿の皮を貸せといふて借て來せ」ワキ「貸せと申してもなか〳〵貸はいたすまい」ッレ「しさりおろ。大名の借るといふに、何んの貸さぬといふ事があらふ。いかい大名じやといふて借て來い」ワキ「畏つて御座る。なふ〳〵猿引、たのふだ人のおいやつた事をお聞やつたか」ッレ「なか〳〵是で承つて御座る。お大名と申すものは、我儘なもので御座る。皮を貸しますれば猿が死にまする。貸す事はならぬとおつしやれ」ワキ「はア申上まする」シテ「むゝ扨は後を返すまいかと思ふていふと見えた。又往ていはふには大名のいふ事には違ひはない。五年か七年靱に懸たらば、後は返やす程に貸せといふて借て來い」ワキ「畏て御座る。なふ〳〵お聞やつたか」ッレ「なか〳〵承つた。兎角貸すことも遣る事もならぬとおつしやれ」シテ「やい〳〵聞た〳〵。さては大名でないと思ふて侮るさうな。其義ならば、此大墓股を以て猿引共に只一矢に射殺いて取る。やらぬぞ」ッレ「はア待て下され〳〵。成程、猿の皮を上ませう」シテ「慥と左樣でおじやるか」ッレ「上げませう」シテ「左樣もおじやるまい。さアおこせ」ッレ「お待なされませい」シテ「待

大墓股―鏃が股になりたる矢

てといふは、未だ猿の皮を惜むさうな」ッレ「いや左樣では御座りませぬ。其大蓁股で射殺されましたらば、猿の皮に疵が付て役に立ますまい。此處に猿の一打と申して、只た一打で死にまする灸所が御座ります程に、皮の疵のつかぬ樣に打殺いて上げませうと申す事で御座る」シテ「しかと左樣でおじやるか。急いで打殺いて渡せ」ッレ「畏つて御座る。やいましよ、小猿の時から飼置て、明暮其方が庇で、世を樂々と暮した處に、又只今打殺す。成らぬと申せば殿樣の、某をも大蓁股で、射殺さうと御意なさるゝ。不便に思へども一打に打つほどに、恨みと思ふてくれるなよ。サア只た今打つぞ。あれ〳〵あれを御覽なされ。打殺さるゝ杖とは知らず、常々教へこふだ事かと存じて、打るゝ杖を押取て、船漕ぐ眞似をしますはいの」シテ「何んといふぞ。打殺すとは知らいで、杖さへ上げれば藝をすると心得て、船漕ぐ眞似をするといふか。哀れな事じやな」ッキ「あはれな事で御座ります」シテ「やい畜生さへ物を知て歎くに、殿が物のあはれを知らぬといふは、鬼畜木石に劣つた。命を助けた。早々連て歸へれ」ッレ「はァ、有難ふ存じまする。然らば目出度ふ御家御繁昌、息災延命富貴萬福の、御祈禱いたして歸りませう。猿が參りて能仕る。御知行增る目出たき踊るが、手元小腰をゆり合せて、舞ふたる風情の面白さよ。突

ましよ―猿よ

こふだ―込んだ

にんみやう―人命か

那波云々―何れも搖曳の名所

黒ごま云々―不詳

勇健―法華經に獅子王勇健とあるより獅子と續けたり

五衰三熱―元衰は天人にありて漸々衰滅の兆を示し三熱は闘蛇にあり毎日三度ゴ、熱き目に逢ふ苦あるを云ふ

五常の寶―仁義禮智信を寶劍に象る

立上りて棚を見よ。やれ天から寶が天降つて、にんみやう草木增長すれば、東表の泉水ぢに、積だる寶はどれ〳〵ぞ。綾が千反錦が千反、唐物を積たゝえて、はんや、ハツアこりやく〳〵。此方の庭を今朝こそ見たれ。黄金の花が咲や亂るゝ〳〵。夜さの泊りは何處泊りぞ〳〵。那波か佐古志か室が泊りか〳〵。船の中には何とお寢るぞ〳〵。苫を敷根に舵を枕に〳〵。汲だる清水に影見れば〳〵、我身ながらもしほらしや〳〵。松の葉越に月見れば〳〵、暫し曇りて又冴える〳〵。一の幣建て二の幣建て、三に黑ごましなのをとれ。船頭殿こそ勇健なれ。泊り〳〵眺めつゝ、かのまた獅子と申するは、百濟國より普賢文殊の召されたる、猿と獅々とはお使者の役。猶ほ千秋や萬歲の、俵を重ねて面々に、俵を重ねて面々に、俵を重ねて面々に、樂ふなるこそ日出たけれ」舞納むると見えし時、猿の役人面押取て棄ければ、恒寂僧都顯れ出で、行平を取て伏せ、「汝知らずや、我はもと他方界の惡龍なり。娑迦羅龍王の威勢に押され、五衰三熱歇む事なし。故に、日本五常の寶を奪ひ、我威を振はんと欲し、障碍を爲せし力なく、今俳優に紛れ、汝に仇を報ずる」と、細首取て引拔んとせし處へ、浦島太郎足輕々と馳來り、敵を摑んで差上げ、「我れ仙宮に入り、生ながら神となり、國土を守り惡魔を攘ふ神力の、神變自在

を見よや」とて、大地に打付け蹈付れば、骨は微塵と蹈碎かれて、朝敵亡び失せてけり。猶君が代は萬年の、龜に契りし浦島が、千歳の姿舞鶴の、舞ひ悅ぶや松竹の、家も千年名も千年、壽命も千年三千年、松に花咲く御代の民、富貴の宿こそ嬉しけれ。